竹島

竹島の発電所

戦後の日本は、電気事業の独占を避けるため事業者の再編成を行い、電力拡充政策を推進した。そして昭和29(1954)年、離島振興法の制定で電気の導入が図られ、三島では燃料を使った発電を行うようになった。

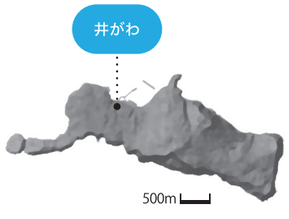
竹島は、昭和33(1958)年にA火力発電所が完成。出力は10kwで、明かりが点いた戸数は59戸、全体の98%になる。出力は小さく、明かりを確保するほどのものだった。運営費が高く、施設の能力から夜間4時間しか送電できない状態だった。

当時の話を聞くと発電所はBC井がわの近くにあり、冷却水を井がわからポンプ(Bに写っている小さな小屋)で送っていたそうだ。送電は午後6時から9時半頃までだったのではとのこと。送電時間後はD灯油ランプを使ったらしい。当時竹島で使っていたランプにはE卓上型の洒落たものもあった。

その後、竹島に24時間送電が実現したのは昭和52(1977)年。19年続いた時間制限の送電は終わる。この頃、本土ではすでに高度成長期が終わり、原子力発電が始まっていた。翌年には、アーケード型のコンピューターゲームが普及し始める。三島村の電気の歴史から、目まぐるしい本土の生活から離れた当時の島の暮らしぶりがうかがえる。

思い出話

「状態のよいランプは学校の先生にあげました。ランプ以外で主人との思い出があるものは愛着があって残しています。」

竹島地区 80代 女性

4